OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜図書紹介＞『ラテン語が教えるもの』
Author(s)	原田, 裕司
Citation	大阪大学言語文化学. 1998, 7, p. 228-229
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78077
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

図書紹介

ここでは、言語文化学会員が出版に関して大きく関わった図書について、本人が紹介いたします。

原田裕司著 『ラテン語が教えるもの』、近代文芸社、1998年6月20日、
400頁、2500円。ISBN4-7733-3587-4 C0095

本書の各章を成す11編の論文と3編の随筆は、第1部・第1章に付した72行のラテン語の拙詩DEAが初出であるのを除き、私が1985年から95年までの10年間に学術雑誌等に発表したものである。それらはいずれもラテン語・ラテン文学に関わるものであり、「近・現代のラテン語文化」、「古代・中世のラテン文学」、「近世日本のラテン語受容」という3つの主要テーマに大別することができる。第1部の3編の随筆もそれぞれこの3つのテーマに符合しており、いずれもラテン語に寄せる私の真情を良く伝えている。冒頭の「はしがき」では、このような書物を出版するに至った事情を、ラテン語教師としての私の生い立ちをまじえつつ語っている。本書は自己の研究成果を世に問うというよりは、むしろこれまでの私の拙い学究生活に一区切りを付けるという性格のものである。ゆえに各章の配列もその執筆順に従っている。また本書の内容も、著者である私が読者に教えるといった類のものではない。それはすべて表題にいうラテン語が教えてくれたものなのだ。以下目次の概略をもって本書の内容紹介としたい。(原田裕司[1])

[本書の目次概略]
はしがき
第1部　随筆
　1章　ドイツでかかった「不治の病い」—私のミュンヘン闘病記—（1989年）
　　付録：DEA［ラテン語詩］（1986年）

---

[1] 言語文化部ドイツ語教育講座

2章　ラテンの古写本を求めて—ヨーロッパを結ぶ図書館の旅—（1991年）
3章　清らなる月、空に輝けば—ケンペル、ツュンベリー、シーボルトの思い出—（1992年）
第2部　論文
1章　テーゲルンゼーの恋文について—11通の全訳とともに—（1985年）
2章　オトフリートよりリュートベルトへ—『福音書』上程状について—（1986年ラテン語要約付）
3章　De Latinarum litterarum initiis quae fuerunt in Iaponia［日本における初期のラテン語文化—原マルチノの1587年のラテン語演説を中心に—］（1987年）
4章　「テーゲルンゼーの恋文」と「最初のドイツ語恋愛詩」をめぐって（1989年）
5章　『ヘーリアント』序文をめぐって（1989年ドイツ語要約付）
6章　シオン司教H宛てのノトカーの手紙と中世初期に至る翻訳文学の伝統（1990年ラテン語要約付）
7章　Hugonis Primatis Aurelianensis carmen de excidio Troiae［フーゴー・プリーマース著『トロヤ滅亡の詩』の校訂］（1991年）
8章　文学としての書翰—キケロー、ルプス、結城ディオゴの三書翰の例—（1992年ラテン語要約付）
9章　現代におけるコミュニケーションの言語としてのラテン語（1992年ラテン語要約付）
10章　フロウムントのフォイヒトヴァンゲン書翰集（1993年ラテン語要約付）
11章　ゲーテとラテン語訳『ヘルマンとドロテーア』（1995年）
索引